



資料

認知症カフェの運営課題に対する工夫 —横浜市内認知症カフェ実態調査（2019）自由記述の二次分析—

田島明子^{1*}, いたうたけひこ², 小菅聡一郎³, 池田保⁴

¹ 湘南医療大学 保健医療学部

² 和光大学

³ 認定 NPO 法人市民セクターよこはま

⁴ 北海道リハビリテーション大学校

要旨

【緒言】

横浜市内認知症カフェ実態調査（2019）における認知症カフェの運営の工夫に対する自由回答についてテキストマイニングツールによる二次分析を行い、参加促進や人材確保のための工夫を明らかにした。

【方法】

分析の対象は、実態調査内の「参加しやすい雰囲気を作る工夫」「参加できない人が参加するための工夫」「継続的に運営する方法」「運営側の人材育成の方法、協力者の募集」の自由回答であった。方法は、テキストマイニングツールによる分析を行い、単語出現頻度を明らかにした。さらに単語出現頻度が高頻度であった概念ごとに原文を参照し、表現の多い原文を記述した。

【結果】

各自由回答において単語出現頻度が高頻度であった概念は、『参加促進』については、「参加者」「スタッフ」「自由」「雰囲気」「送迎」「参加」、『人材確保』については、「スタッフ」「ボランティア」「開催」「講座」「参加」であった。

【考察】

参加者が主体的に楽しく参加できる雰囲気づくりやボランティアの継続的確保のための工夫について、健康志向性のある学びによって地域交流の機会を持つことが肯定的な雰囲気作りに繋がると考えられた。また、ボランティアの継続的確保のために認知症への学びの機会を認知症カフェにて持つことが有効であると考えられた。

受付日 2023年9月15日

採択日 2024年4月1日

*責任著者

田島明子

湘南医療大学

E-mail:

akiko.tajima@sums.ac.jp

キーワード

認知症カフェ

実態調査

二次分析

1. はじめに

(1) 日本における認知症カフェをめぐる動向

認知症カフェは、1997年にオランダで老年心理学者の Bere Miesen が Alzheimer カフェを開いたのが起源とされる。日本では2015年認知症施策総合戦略（新オレンジプラン）で2018年までに各自治体で認知症カフェを開くことが目標として掲げられた。認知症カフェ

に、地域社会が認知症への理解を深めること、認知症の人の介護者への支援、新しい認知症ケアモデルの開発等が期待されてのことである¹⁾。

2015年以降、認知症カフェは急激に増加しており、近年、8000か所以上設置されている²⁾。しかし認知症カフェの運営方法や内容についての基準が国や県から示されていないなか、多くの認知症カフェが手探りで運営し

ているため³⁾、様々な課題も抱えている⁴⁾⁵⁾。兼田ら⁴⁾によれば A 県内の認知症カフェ事業の課題として、認知症の人本人や家族の参加が少ない点や将来的な継続に不安な点が挙がっていた。金治ら⁵⁾によると名古屋市内の認知症カフェの調査結果から、「カフェの認知度が低い」、「参加者が少ない」、「運営スタッフの確保が難しい」、「協力者の確保が難しい」等が課題として挙がっていた。2023年3月に発行された認知症介護研究・研修仙台センターによる認知症カフェの調査研究報告書においても、「認知症の人の参加者が集まらない」に76.7%、「将来的な継続」に60.2%、「運営スタッフの不足」や「運営スタッフの人材育成」に4割弱が「課題あり」としており、継続的運営を視野に入れた際に認知症カフェの参加促進や人材確保に課題があることがわかる⁶⁾。

(2) 横浜市における認知症カフェの取り組み

横浜市は神奈川県東部に位置する市であり、神奈川県庁所在地及び最大の都市である。人口370万人近い政令指定都市であり、高齢化率は2022年度に25%をわずかに超えている。認知症カフェの取り組み状況を見ると、国の動向を受け2015年に認知症カフェワーキングを立ち上げ、認知症カフェホームページの掲載を開始した。2017年に認知症カフェ支援者向けの認知症カフェ連絡会を実施し、2019年に認知症カフェの実態調査を行うとともに、認知症カフェの立ち上げやフォローアップのための研修会を開催し始め、その後毎年実施している。2021年に認知症カフェを紹介するためのリーフレットを作成し、2022年には認知症カフェ運営者向け情報誌『ハマオーレ』を作成し、ホームページ上でも紹介している。

2019年に実施した横浜市内の認知症カフェの実態に関する調査⁷⁾（以下、本調査とする）では、横浜市内にある109か所の認知症カフェを対象として、認知症カフェの現状や課題や効果の他、課題に対する工夫についてもアンケート調査を実施している。本調査結果は、横浜市のホームページにおいて閲覧が可能である⁷⁾。また多数の認知症カフェが回答している貴重なアンケート調査結果であり、課題に対する工夫について多くの自由回答が寄せられているが、詳細なデータ分析は行われていない。

(3) 本研究の目的

本調査には自由回答項目として、「参加しやすい雰囲気を作る工夫」「参加できない人が参加するための工夫」「継続的に運営する方法」「運営側の人材育成の方法、協力者の募集」がある。それらは認知症カフェの実践課題

に対応する貴重なデータであるが、自由回答は分析されていないため、本研究では、それら自由回答項目をテキストマイニングツールにより二次分析することにより、認知症カフェで生じる重要な課題とされる、①認知症の人や家族の参加促進、②認知症カフェ運営のための人材確保に対する工夫を明らかにすることを目的とした。①については自由回答項目の「参加しやすい雰囲気を作る工夫」「参加できない人が参加するための工夫」、②については「継続的に運営する方法」「運営側の人材育成の方法、協力者の募集」を対応させた。

2. 方法

(1) 本調査の概略

本調査の概略を説明する。調査対象は2019年3月31日時点で開設している横浜市内の認知症カフェであった。横浜市内の認知症カフェに調査票を郵送し、認知症カフェの運営者に回答を依頼した。調査期間は2019年5月10日から2019年6月14日であり、回収88票、回収率は80.7%であった。

調査結果であるが、主な開催場所は地域ケアプラザ（高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として取組を行う横浜市独自の施設）が最も多く、次いでグループホームや小規模多機能事業所、介護保険施設等であった。主な運営主体は地域ケアプラザ、地域のボランティア、個人、有志のケアマネジャー、有料老人ホーム等であった。定期的な単独での開催が77%であり、開催頻度は月1回が78%であった。1回あたりの開催時間は2時間が半数以上であった。プログラムはカフェタイム、アクティビティ、介護相談、ミニ講話が多く、参加者は20~25人が最も多いが、0~65人まで幅があった。認知症の人の数は1~5人未満が半数を占めていた。認知症の人以外の参加者は地域住民が62%、家族・専門職がそれぞれ14%、その他は10%であった。運営スタッフはいるが73%、いないが23%であり、運営スタッフの職種は介護支援専門員、社会福祉士、看護師、介護福祉士の順で多かった。

(2) 分析の対象

本調査における自由回答項目（横浜市における認知症カフェの実態に関する調査結果の詳細）の全体像を示す（表1）。本研究においてはそのなかで「参加しやすい雰囲気を作る工夫」「参加できない人が参加するための工夫」「継続的に運営する方法」「運営側の人材育成の方法、協力者の募集」の自由回答項目⁷⁾を対象とした。

表 1. 横浜市における認知症カフェの実態に関する調査結果の詳細

1.運営スタッフの役割について	専門職の役割 地域住民の役割 その他の人の役割
2.開設までの経緯	
3.始めるにあたって課題となった点	
4.現状のカフェ運営の課題や現状について	認知症カフェを運営するうえで感じている課題や疑問について
5.すでに取り組んでいる課題に対する工夫の内訳	認知症の人や家族に周知する方法 地域の人に周知、広報する方法 運営側の人材育成の方法、協力者の募集 継続的に運営する方法 参加できない人が参加するための工夫 参加しやすい雰囲気を作る工夫
6.認知症カフェの効果	認知症の人への効果 地域住民への効果 家族介護者への効果 専門職等への効果 その他の効果

註)下線部分が本研究において使用した自由回答項目である。

(3) 分析の方法

自由回答項目の自由回答に対して、クラウド上にて無料で利用できるテキストマイニングツールであるユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) による分析を行い、単語出現頻度を明らかにした。これを手がかりに単語出現頻度が高頻度であった概念に対して Microsoft Word の見出し機能と検索機能を利用して原文を参照し、表現の多い原文を記述した。なお本研究はデータ数が限られているため共起ネットワークやクラスター分析など大規模データにおいて適切な方法は採用していない。倫理的配慮として、著作権に配慮し、原文の表記や意味内容のまま掲載するように努めた。

3. 結果

以下に本調査の自由回答に対するテキストマイニングツールによる分析結果を示す。

(1) 参加しやすい雰囲気を作る工夫 (回答数 51, 単語数: 名詞 175, 動詞 49, 形容詞 13)

「参加しやすい雰囲気づくりの工夫」における単語出現頻度は、出現頻度順に、名詞では、「参加者」「スタッフ」が 8 回、「自由」「雰囲気」が 6 回、「申込」「工夫」「認知症」「ボランティア」「カフェ」「参加」が 5 回であった。また、形容詞では、「楽しい」が 5 回であった。

出現頻度が上位 2 位までの単語として、「参加者」「スタッフ」「自由」「雰囲気」の原文を参照したところ、「参加者」については、「参加者が楽しめる」「参加者さんもみんな講師をスローガン」「参加者数に対してスタッフを多めに配置」等の表現があった。「スタッフ」については、「スタッフが参加者の様子を見ながら声掛けや雰囲気づくりを行う」「話し相手になること。名前を覚える」「スタッフが仲良い事」「ミーティングで、スタッフでアイデアを出している」等の表現があった。「自由」については、「参加費無料」や「出入り自由」の表現が多くなされていた。「雰囲気」については、「参加しやすい雰囲気」「話しかけやすい雰囲気づくり」「明るく楽しい雰囲気づくり」といった目指す雰囲気についての表現や、「地域の方が地域の方のために作り上げていく」「室内の装飾、お花やステッキホルダー等を準備」「テーブルの花や音楽を流して」等、そのための具体的な工夫についての表現があった。

(2) 参加できない人が参加するための工夫 (回答数 37, 単語数: 名詞 118, 動詞 27, 形容詞 6)

「参加できない人が参加するための工夫」における単語出現頻度については、出現頻度順に、「送迎」(名詞)が 14 回、「参加」(名詞)が 7 回、「認知症」(名詞)が 4 回、「できる」(動詞)が 5 回であった。出現頻度が上位 2 位までの単語として、「送迎」「参加」の原文を参照

したところ、「送迎」については、「送迎をする」という表現が多くみられた他、「送迎ボランティアに依頼をする」「家族に送迎をしてもらう」「出前講座を行う」等の表現があった。「参加」については、「参加が難しい人」として「認知症の人」「車いす利用者」「施設入居者」が挙がっており、そうした人たちが参加できるように送迎を行う等の配慮をするといった表現がなされていた。

(3) 継続的に運営する方法 (回答数 47, 単語数: 名詞 118, 動詞 26, 形容詞 2)

「継続的に運営する方法」における単語出現頻度については、出現頻度順に、「スタッフ」(名詞)が10回、「ボランティア」(名詞)が8回、「開催」(名詞)が8回、「カフェ」(名詞)が6回、「行う」(動詞)が4回であった。出現頻度が上位2位までの単語として、「スタッフ」「ボランティア」「開催」の原文を参照したところ、「スタッフ」については、「スタッフのチームワーク」「スタッフのコミュニケーション」「スタッフの打合せや共通理解」「スタッフ会議の実施」等のスタッフ間の共通理解のためのコミュニケーション機会についての表現の他、「カフェスタッフの組織化」「スタッフが大勢いて、誰が休んでもOK」といったスタッフの組織体制についての表現もあった。「ボランティア」については、「ボランティアのモチベーションの維持」や「ボランティアが楽しくいてほしい」「ボランティアが運営主体」等、ボランティアの望まれる状態についての表現の他、「振り返りでフィードバック」「毎回カフェ終了後にボランティアと反省会」「ボランティアの勉強会の開催」等、望まれる状態のために行われる内容についての表現があった。「開催」については、「日時の変更をせずに、とにかく開催」「開催月の定型化」「定期開催」等の表現が多かった。

(4) 人的資源の確保の方法 (回答数 43, 単語数: 名詞 126, 動詞 30, 形容詞 0)

「運営側の人材育成の方法、協力者の募集」における単語出現頻度は、出現頻度順に、「ボランティア」(名詞)が13回、「講座」(名詞)、「参加」(名詞)が8回であった。出現頻度が上位2位までの単語として、「ボランティア」「講座」「参加」の原文を参照したところ、「ボランティア」については、医療系学生や地域の人に「ボランティアとして手伝いをお願いします」「広報誌やSNSを通じた広報」「ボランティアリストからの直接の声掛け」「ボランティアを対象とした講座の実施」等の表現があった。「ポイントの付与」や「ボランティア同士の口コミ」といった表現もあった。「講座」について

は、「ボランティア講座の開催」や「ボランティア講座との連携」の他、『ボランティア講座の際に「協力してもらえますか?」というアンケートを配ってやってみたい方を集めている』等の表現があった。「参加」については、「ボランティア」や「講座」で見られた表現以外に、「関連図書の購入と関連他カフェへ参加し意見交換」や「他認知症カフェの見学」の表現があった。

4. 考察

本研究の目的は認知症カフェの課題である「参加促進」「人材確保」に対する工夫を明らかにすることであり、結果より、一人ひとりの参加者が主体的に楽しく参加できる配慮やボランティアへのアクセスやモチベーション維持への工夫が明らかになった。

(1) 本調査の位置付け

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、多くの自治体で認知症カフェ開催の自粛要請がなされた。再開率は、2021年8月時点で30%程度であった⁸⁾。認知症カフェの休止が認知症の人、家族等にもたらした影響として、「意欲低下」「物忘れの進行」「家での介護負担感の増加」等が挙がっていた⁸⁾。こうした特異的な社会状況の経験から、オンラインで開催する認知症カフェも出ている⁸⁾。

また、認知症介護研究・研修仙台センターによる認知症カフェの調査研究⁶⁾によれば、主たる運営者・主たる開催場所・主たる内容を認知症カフェの類型化の骨子としている。それによると、本調査で最も多い運営者・実施場所は「地域ケアプラザ」であり、それは本調査の特徴と考える。「地域ケアプラザ」は、横浜市地域ケアプラザ条例⁹⁾を基に、地域住民の福祉活動、保健活動の支援やこれらの活動の交流のための場の提供等を目的に設置される横浜市独自の施設であり、現在横浜市内18区に、それぞれ4~10数か所存在している。指定管理者として社会福祉法人等が運営をしている¹⁰⁾。地域ケアプラザは、上記の類型化に当てはめるなら、「主たる運営者」は行政、介護・医療等機関、「主たる開催場所」は公共施設と位置づけられる。したがって、本研究の結果はそうしたタイプの認知症カフェにおいてより役立つ可能性があると考えられる。

(2) 認知症カフェの課題に対する工夫について

研究目的に沿って、①認知症の人や家族の参加促進、②認知症カフェ運営のための人材確保の工夫について考察を行う。

1) 認知症の人や家族の参加促進

結果より、一人ひとりの参加者が主体的に楽しく参加できる配慮が必要であり、そのために、スタッフの配置やコミュニケーションが良好であること、参加費が安価で出入り自由であること、好感もてる雰囲気づくりのために室内装飾や音楽などの工夫も有効であることがわかった。

矢吹によると、スタッフの資質として、「誰もが受け入れられる雰囲気をつくり、参加者をもてなすことができる」とあり、「雰囲気や空気感をつくりだすセンスが必要」とある¹¹⁾。一方で、公的な会議室を開催場所として使う場合、雰囲気を作り出す難しさを指摘している。認知症介護研究・研修仙台センターによる認知症カフェの調査研究⁶⁾において参加費平均は177.1円（最高3500円、中央値100円、最頻値100円）となっており、安価な参加費は参加を促進する要因となるが、一方で雰囲気づくりに限界を生じる誘因にもなると考えられる。

長谷ら¹²⁾は、雰囲気とは「その場所（に居る人たち）が自然に作り出している、特定の傾向を持つ気分」で、人間の行動時に伴うものであり、先行研究では、雰囲気は、肯定と否定を両極に変動し、参加者がその場で感じた雰囲気が肯定的であれば十分に動機づけられていると感じ、否定的な雰囲気を感じると動機づけが低下する場合があるとする。そして雰囲気と動機に影響を与える外部因子として環境、人、役割、活動があるとする。

本研究の結果から、「参加しやすい雰囲気」「話しかけやすい雰囲気づくり」「明るく楽しい雰囲気づくり」といった目指す雰囲気についての表現や、「地域の方が地域の方のために作り上げていく」「室内の装飾、お花やステッキホルダー等を準備」「テーブルの花や音楽を流して」等、そのための具体的な工夫についての表現があったが、それらは、環境への配慮から人の相互作用を促進しようとする発想と言える。長谷ら¹²⁾を参考にするなら室内装飾等の作成を認知症カフェにおける役割活動とすることで、費用をかけずとも参加者にとって肯定的で動機づけられた雰囲気づくりを促進できると推察される。

藤村ら¹³⁾は、認知症カフェの継続参加要因として、「健康意識・介護予防意識の向上」「地域貢献意識の醸成」を挙げる。認知症カフェの目的は認知症に対する無理解や偏見の払拭であるため、認知症予防の強調には注意を要するものの、参加者の要望に応じつつ健康志向性に影響のある「情報提供と学び」、適宜、役割活動を取り入れながら「地域交流の促進」を図ることは⁹⁾、本研究の結果から、多くの参加者が関心を持って主体的に参加するための多様なコンテンツの1つとして、より肯定

的で動機づけられた雰囲気づくりの醸成に繋がると考えられる。

またオンライン等による開催方法は、これまで参加が難しかった人のために有効に機能すると考える。しかし矢吹が指摘するように⁸⁾、オンラインツールに不慣れた参加者にとって利用のハードルを下げる配慮が同時に必要である。

2) 認知症カフェ運営のための人材確保

結果より、認知症カフェ運営のための要となる人材はボランティアであり、ボランティアの継続的確保のために、医療系学生等関心のありそうな層へのアクセスやボランティアのモチベーション維持のための工夫を行っていた。

相原らによれば、ボランティアが参加するカフェはボランティアの参加がないカフェと比べ認知症の人の参加人数が多い傾向にあった¹⁴⁾。ボランティアによる認知症の人への支援は、専門家によるアプローチのみの場合と比べ、より認知症の人に良好な影響があるとされる¹⁴⁾。その点からも認知症カフェにおける認知症への理解と意欲のあるボランティアの継続的参加は重要な課題であると言える。

先行研究においてボランティアの募集の仕方や育成方法について述べられているが¹¹⁾、本研究の結果から、ボランティアのモチベーション維持の重要性が浮き彫られたと言える。そのためにも、本研究の結果から有効とされた、認知症カフェのなかでボランティアが自発性を維持できるような認知症に関わる理解やスキルについて学びを深める機会の創出や、ボランティアが認知症カフェについての見識とともに問題関心や意識を深められるよう、他の認知症カフェとの意見交換や見学機会の創出がなされると良いと考えられる。

また、医療系学生としては、運営スタッフとしても関わりの多い看護分野の学生の他、リハビリテーション分野、薬学分野の学生などが想定される。田島らにおいて、医療系学生が地域での活動に関心を持つためには、地域で医療職が活動する姿のイメージを作ることが重要であった¹⁵⁾。先行研究では、大学における看護教育の一環として認知症カフェを実施し、学生にとっては認知症高齢者へのイメージや理解を深める契機となり、認知症高齢者にとっては学生との関わりから良好な刺激が得られ、双方にとってメリットが生じた事例の紹介や¹⁶⁾、薬学生が大学における薬学教育の一環として認知症カフェ参加者に対して疾病予防のためのテスト連動型講義を行い、疾病理解の促進に貢献できたとの報告がある¹⁷⁾。地域包括ケアシステムにおいて医療関連職種の地域での活躍が増々期待されている。認知症カフェもその一翼を



担う重要な場であることから、専門教育課程内において医療系学生の認知症カフェへの参加による認知症高齢者との直接的交流や医療職としての関わり方の学修機会を提供することによって、ボランティアとしての関与のみならず、将来的に運営スタッフとしての積極的な関与へ繋がることも期待できると考えた。

5. 本研究の限界

本調査における調査票を確認すると、自由回答について、「アイデアだけのご記入でも構いません」とあるため、実際に行われている工夫であるかは明確ではない点は本研究の限界である。また本調査の実施時期は2019年であることから、認知症カフェの新しい実施形態に対して十分には参考にならない可能性がある。さらに、地域特性や開催目的、運営頻度により認知症カフェの課題も異なることが想定されるため、本研究結果の一般化には限界がある。今後の課題としたい。

謝辞

横浜市健康福祉局高齢在宅支援課には、本論文の作成にあたり、横浜市における認知症カフェの取組みについての情報の提供にご協力を賜りました。心より御礼を申し上げます。

COI について

開示すべき COI はない。

文献

- 1) 武地一：認知症診療における認知症カフェの役割。内科 120: 229-232, 2017
- 2) 武地一：認知症カフェと地域包括ケア。神経治療 39: 670-674, 2022
- 3) 堀川京子：岡山県における「認知症支援のカフェ」に関する調査報告。美作大学・美作大学短期大学部紀要 65: 61-65, 2020
- 4) 兼田絵美, 上城憲司, 真島伸也, 他：A 県における認知症カフェ事業の現状と運営課題。認知症ケア研究誌 5: 24-29, 2021
- 5) 金治宏, 山本文香：名古屋市における認知症カフェの現状とその運営に関する一提言。中京大学経済学部研究紀要 26: 49-58, 2019
- 6) 認知症介護研究・研修仙台センター：認知症カフェの類型と効果に関する調査研究報告 https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/97_touhokuhukushi.pdf, 2023. 4. 29 アクセス
- 7) 横浜市：横浜市における認知症カフェの実態に関する調査報告書。 https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/fukushi-kaigo/koreisha-kaigo/ninchisyo/ninchisyo-sodan/ninnti-cafe.files/0003_20200403.pdf, 2023. 4. 28 アクセス
- 8) 矢吹知之：新型コロナウイルス感染症が認知症カフェにもたらした影響。日本認知症ケア学会誌 20: 260-267, 2021
- 9) 横浜市：横浜市地域ケアプラザ条例。 https://cgi.city.yokohama.lg.jp/somu/reiki/reiki_honbun/g202RG00000627.html, 2023. 4. 29 アクセス
- 10) 横浜市：地域ケアプラザ一覧。 <https://www.city.yokohama.lg.jp/lang/residents/living-guide/welfare/careplaza2.html>, 2023. 4. 29 アクセス
- 11) 矢吹知之：認知症カフェ読本－知りたいことがわかる Q&A と実践事例－, pp69-70, 中央法規, 2016
- 12) 長谷龍太郎, 山田孝：脳性マヒ児に対する作業療法におけるクリニカルリーズニング区分の研究。日保学誌 10: 101-115, 2007
- 13) 藤村一美, 長谷亮佑, 木嶋彩乃他：地域高齢者の認知症カフェへの参加に至る動機と継続参加要因の検討。山口医学 70: 71-81, 2021
- 14) 相原洋子, 前田潔：兵庫県の認知症カフェにおけるボランティア活動の現状と課題。厚生指標 66: 20-25, 2019
- 15) 田島明子, 慶徳民夫, いとうたけひこ：地域作業療法学を受講したにも関わらず地域作業療法に関わりたと思わなかった理由－質問紙調査結果のテキストマイニング分析－。リハビリテーション教育研究 24: 24-25, 2018
- 16) 辻幸美, 高岡哲子, 吉田直美：学生と地域を巻き込んだ認知症理解に関する活動報告。北海道文教大学研究紀要 43: 89-95, 2019
- 17) 宮薫子, 角南友佳子, 道原明宏：薬学生による認知症カフェ参加者を対象とした疾病予防に関するテスト連動型講義の有効性と継続的理解度の評価。社会薬学 39-1: 23-29, 2020

Reference Paper

Ideas for Management of Dementia Cafés: Secondary Analysis of Open-ended Responses from the Yokohama City Dementia Café Fact-Finding Survey in 2019

Akiko Tajima^{1*}, Takehiko Ito², Soichiro Kosuga³, Tamotsu Ikeda⁴

¹ Shonan University of Medical Sciences

² Wako University

³ Shimin Sector Yokohama

⁴ Hokkaido Rehabilitation College

ABSTRACT

【Introduction】

In the present study, secondary text-mining tools analysis of open-ended responses to questions about innovations in the operation of dementia cafés in the Fact-Finding Survey was conducted to identify ideas for stimulating participation in the cafés and securing volunteers.

【Methods】

We examined the free responses to the following questions in the Fact-Finding Survey: “How to create an atmosphere to facilitate participation,” “How to make it possible for those who cannot participate to participate,” “How to operate the program continuously,” and “How to develop personnel on the management side, and recruit collaborators.” Text-mining tools analysis was performed to determine the frequency of word occurrence. In addition, we referred to the source text for each concept that had a high frequency of word occurrence and described the source text with the highest number of expressions.

【Results】

The concepts with high frequency of word occurrence in each free response in decreasing order of frequency were “participants,” “staff,” “free,” “atmosphere,” “transportation,” “participation,” for securing human resources, and “staff,” “volunteers,” “holding,” “courses,” and “participation,” for promoting participation.

【Discussion】

Ideas for creating an atmosphere in which staff and visitors to the dementia cafés can participate proactively and enjoyably and for securing volunteers at the cafés on an ongoing basis are discussed. It was found that having opportunities for health-oriented learning through community interaction would help create a positive atmosphere. In addition, it was considered that having learning opportunities about dementia at dementia cafés would be effective in securing volunteers on an ongoing basis.

Key words: Dementia Cafés, Fact-Finding Survey, Secondary Analysis